

友の会だより 14号

都歴研友の会事務局 〒191-0033 東京都日野市百草971-158 増田方
電話・FAX 042-591-1853 ホームページ [http:// rekishitomonokai.sakura.ne.jp](http://rekishitomonokai.sakura.ne.jp)

友の会史跡見学会

「富士の恵み」を訪ねて

小澤拓美

2019(令和元)年度の都歴研友の会研修旅行は「富士の恵みを訪ねて」をテーマに、マイクロバスを用いて山梨県郡内(ぐんない)地方を周遊しました。しかし、旅行実施が目前に迫った10月12日に台風19号が東日本を通過し甚大な被害をもたらしました。中央本線も不通となり、18日に単線として復旧後も変則ダイヤが続いていました。通過を予定していた県道でも斜面崩落が発生し通行不可となりました。

直前まで中止か決行かと厳しい判断を迫られましたが、実施の2日前に中央本線が全面復旧し、30・31日とも素晴らしい晴天で旅行が出来たのは実に幸いでした。

最初に申し込まれた方は24人でしたが、事情により4名が不参加となり、初日の30日には13人参加、31日には7人が加わり計20人で実施しました。ご参加の皆様には、厳しい情勢の中おつきあい下さりまことに有難うございました。

東日本大震災・福島原発事故からまもなく10年、あのころ電力についてエネルギーについて考えた気持ちを風化させないためにも、小水力発電をはじめとした郡内の文化は私たちに示唆を与え



駒橋発電所・旧送水管跡にて

てくれると思います。郡内には今回行かれなかった旧尾県小学校・明見池そして駒橋・ハッ沢以外の水力発電所など様々な文化財が、ほとんど訪れる人もなく眠っています。この文を目にする方々がいつの日か郡内地方を訪れてご自分なりの「富士の恵み」を見つけていただければ嬉しい限りです。

主な内容

友の会史跡見学会「富士の恵みを訪ねて」小澤拓美	1
ミニ歴史散策「森鷗外記念館他」多田統一	12
2019年度歴史教育研究助成金を贈呈	13
全歴研大会分科会報告(多田)13/会員著書紹介	14
コロナ禍のなかの友の会活動について	15

<旅行日程>

10月30日 12:00に富士山駅に集合→路線バス→道の駅にて昼食→富士山レーダードーム館→ふじさんミュージアム→路線バス→御師旧外川家住宅→16:50 ころ駅前にて解散

10月31日 8:45富士山駅にて受付開始→9:10貸切バス発車→友の会増田代表挨拶→金(かな)鳥居を車窓見学→9:20北口本宮浅間神社前下車→参道・灯籠群→大鳥居・随神門・手水舎・拝殿・幣殿・本殿→9:30東宮本殿(国重文・伝武田信玄奉納・村上光清修繕)→西宮本殿(国重文)→吉田口登山道入口・祖霊社(長谷川角行・食行身禄・村上光清を祀る)→諏訪社(吉田火祭りの起源地)→徐福に関わる日中交流碑見学→10:00バス乗車→富士吉田IC→勝山城跡(車窓見学)→都留IC→10:30都留市駅前バス下車→10:40小水力発電元気くん2号及び谷村三の丸発電所(山梨県2つめの民生発電所:1200灯の発電:一灯あたり20W)跡見学→元気くん3号→谷村城跡→旧甲斐絹間屋仁科家(商家資料館)→長安寺にてバス乗車→落合水路橋→12:00~13:00道の駅つる

(昼食)→旧甲州街道追分→13:30駒橋発電所・旧送水管6本跡+励磁機用送水管跡→旧鹿留発電所発電機(移転展示)→駒橋発電所/取水堰・取水門・沈砂池・第一号水路(いずれも重文)→猿橋(現状は昭和34年架橋)・第一号水路橋(重文)→台風による道路崩壊により迂回→旧甲州街道犬目宿→兵助実家→兵助墓碑→大野貯水池(重文)→ハッ沢発電所(重文)→松留発電所(車窓見学)→与謝野晶子夫妻散策地(車窓見学)→16:40上野原駅にて解散

<趣旨説明>

2019年春に下記のように趣旨をのべた参加案内を友の会会員に配布しました。

富士山の存在は地域社会、日本社会にどのような恩恵をもたらしたのか、現場を歩きながら考えたい、というのが本企画の狙いです。特に次の3つの観点から考えたいと思います。

<1>富士の景観

まずは、「信仰の対象と芸術の源泉」となった「富士の景観」である。富士の歌は万葉集に11首ある。例えば第十一巻にある「我妹子(わぎもこ)に逢ふよしをなみ駿河なる富士の高嶺の燃えつつかあらむ」は恋の歌であるとともに、富士の噴火を現代に伝える史料でもある。

山多き日本ではあるが、特に白山・立山そして富士は霊山扱いされることが多い。近世初めの長谷川角行(かくぎょう)は富士の洞窟で修業し、富士講の祖と言われる。江戸には、いくつもの富士見坂があり、多くの富士塚が造営された。近代紙幣には5回富士が使われ、うち4回が北側



浅間神社の金鳥居より富士山を望む

からである。有名なのは旧五百円札(岩倉具視)の裏側にあった「雁ヶ腹摺山(がんだらはらすりやま)」からの富士である。これは1942年11月3日に国鉄職員・名取久作氏が撮影した写真による。山頂にはその説明板がある。

そして前の五千円札(新渡戸稲造)の裏にも富士山がある。2004年以降の現千円札(野口英世)の裏にもある。新渡戸札と野口札は、同じ原本に基づき近景の植物を松とシャクナゲに描き分けている。この原本の写真は、写真家・岡田紅陽氏が1935年5月2日に本栖湖の北にある中之倉峠か

ら撮影したものである。

富士の景観と言えば、万葉集や三保松原のように東海道方面からの眺めに歴史がある。しかし、近代紙幣にはほとんど北側が使われる。それはなぜか。何と言っても北斜面は雪が長く残る。それゆえ冠雪の富士と花あるいは紅葉をテーマにするなら北斜面ということになる。

また、富士講の先達は北麓を中心に活動した。先達は御師（おし）ともいい、布教者・登山宿経営・登山案内人という3つの役割を果たした。

また、江戸からは東海道を歩き小仏峠・大月を経て行くほうが容易である。江戸時代には、富士吉田に百軒を超える御師宿が栄えた。その影響であろうが、現在の登山でも古来の表口である富士宮口に比べて富士吉田口が栄えている。

現代では、吉田の御師宿はすっかり衰退し営業はわずか2軒になったが、代わりに多くのホテルや観光施設ができています。富士の景観は信仰・観光に限らず、写真・絵画・文学などさまざまな文化に影響を与えている。

葛飾北斎「富嶽三十六景（1823～35）」の一枚は今回訪問の犬目宿を舞台としている。このシリーズが、西洋近代絵画に影響を与えたことはよく知られている。

太宰治の「富嶽百景（1939）」では、特に河口湖の北にある御坂峠における「富士には月見草がよく似合う」の一文は有名である。芥川賞作家の李良枝（イ・ヤンジ）は富士山麓で生まれ、下吉田第一小・下吉田中・吉田高校等に学んだ在日韓



富士山レーダードーム館にて

国人であり、そのエッセイ「富士山（1989）」は教科書に載ったこともある。多くの優れた山岳小説を書いた新田次郎は、富士山頂測候所勤務経験から文学への道を始めた。

<2>富士の水

富士の恵みは景観だけではない。3776mの高さは低地に比べて平均気温は 23℃ほど低いということになる。東京都心が夏日でも山頂は零度近くである。ここに降った大量の雪は、融ければ地下に浸透し伏流水として裾野で噴き出る。これが忍野八海や富士五湖を形づくる。富士の湧水は鉱泉として貴重なだけでなく、日本で市販されているミネラルウォーターの大部分も、富士の湧水を用いている。富士の南側にも「白糸の滝」や「柿田川湧水」など名所があるが、北側の方がはるかに多く水を供給している。

北側には「富士五湖」がある。山中湖と忍野八



御師日外川家住宅

海の水を集めて流れ下るのが、桂川である。この沿岸を古くから郡内（ぐんない）地方とよぶ。この水を使って、まずは忍野発電所・鐘ヶ淵発電所がある。そして北口本宮浅間神社の門前町を流れる宮川など幾つもの支流を集めて鹿留（ししどめ）発電所・谷村（やむら）発電所・川茂発電所と

続く。落合水路橋で菅野川の上を越した水は、手掘り隧道で菊花山の真下を潜りぬけ、駒橋発電所へ到着する。

駒橋発電所は、高校生用の参考書にも出て来る日本初の本格的水力発電所である。1907 年（明治 44）12 月 20 日に、早稲田の変電所に 15000 k w の長距離送電に成功、これが日本の水力発電の幕開けとなった。駒橋発電所に送られなかった桂川本流の水は溶岩地層をえぐりつつ、大月で巨大な岩稜に当たる。この大岩が、郡内豪族にして武田家臣であった小山田氏の岩殿城である。ここで、桂川は笹子川と合流してさらに溪谷をえぐり、東方へと流れ下る。その溪谷を渡るために架けられ



猿橋からみたハツ沢発電所第一水路橋

たのが猿橋である。天下の三奇橋として、錦帯橋とともに紹介される。流れ下った桂川は上野原を過ぎてから名を相模川と変え、相模国を潤しつつ相模湾に



ハツ沢発電所の取水口、背後の高い山は岩殿城流れ込む。

ところで、名勝・猿橋の隣にもうひとつ文化財がある。猿橋の下流に見えるのは、ハツ沢発電所第一水路橋である。ハツ沢発電所関連の重文指定の一つである。ここを流れる水はどこからきて、どこに行くのであろうか？

もう一度、上流の駒橋発電所に戻ってみよう。発電機を動かした排水に桂川の水を加えて、はるばるとハツ沢に送っているのである。この取水用設備は実に壮大であり、日本最大の重文のスタート地点にふさわしい。いくつもの水路橋や地下水路を通った水は、大野貯水池にたどりつく。ここは農業用・水道用の貯水池ではなく発電用調整池である。

ここからさらに引水した先に、ハツ沢発電所（42000 k w）がある。取水設備・大野貯水池・ハツ沢発電所、途中の水路・水路橋など計 20 件が一括重文指定されている。長さ・高さ・広さいずれをとっても日本最大の重要文化財である。

水力発電は、もはや過去の技術と思われるかもしれない。しかし、現在、駒橋発電所は郡内北部の地下 500mにある葛野川（かずのがわ）水力発電所（現出力 120 万 k w・2024 年完成後は発電機 4 機合わせて総発電量 160 万 k w）も管理している。揚水発電である葛野川発電所も、広く言えば桂川水系の発電所である。これら桂川・相模川

水系の発電能力(揚水発電を含む)を総計すると、現時点で170万kw超、5年後には210万kwを超えることとなる。例の福島第一原発1号機が46万kw、2号機が78万kwであったことを考えると、郡内地方の水力発電が歴史的にも現代的にもいかに凄いことか、と身を正さざるを得ない。

<3>富士の火山灰

火山灰がなにゆえ「富士の恵み」なのか、と思われるだろう。東日本大震災4日後2011年3月15日夜に富士南麓を震源とするM6の地震があった。東京もかなり揺れた。「これは三陸沖の震源とは異質なのだ」と友人の火山学者が教えてくれた。三陸沖地震に触発された火山性地震なのだという。そして「首都圏で最も警戒すべきは富士の噴火だ」と彼は言った。「地震は当面の危機を乗り切り数日生きられれば救援が来る可能性が高い。しかし噴火でおびたしい降灰を受け、その後雨が降れば(宝永4年の噴火では直後の江戸で降雨)、火山灰はセメントをかき混ぜて固めたような状態になりトラック輸送は全面ストップだろうから、物資の補給はいつになるか分からない」ということである。

富士の裾野を歩くと「鎮爆」という祈りの石碑をよく見る。先祖の祈りがよくわかる。富士周辺におびたしくある浅間(せんげん)神社は基本的に噴火がないように祈る社である。宝永の時の噴煙は、東に流れた。風下に多くの降灰があり村々は壊滅した。この農民の辛苦を描いたのが、新田次郎「怒る富士」である。噴火の恐ろしさと政治の無責任をよく描いている。

富士は、有史以前から多くの噴火を繰り返しているので、溶岩や火山灰は北にも流れている。それゆえ、郡内地方の土質は水田耕作には向かず生産性は低い。標高が高く寒冷で狭隘な土地柄だけでなく、このことも郡内の人々に試練になった。小山田氏が滅んだ後、江戸時代初め郡内の領主になった秋元氏は、桂川の水を誘導して郡内の生産力を上げようとした。それが谷村大堰(やむらおおぜき)の大事業である。少しは農業用水・飲用



旧甲斐絹問屋仁科家(商家資料館)

水を確保できたが、それは郡内全体からいえばわずかな面積でしかなかった。

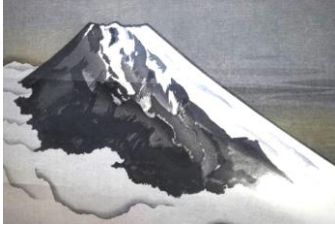
生産力の低い耕地は、特に天候不順の年には打撃であった。特に、天保年間には冷夏による凶作が続いた。そうした中、商人たちは投機を狙って米の買い付けをし、ますます米価が高騰していった。この結果起こったのが「郡内騒動」である(「天保七年一揆」とも言う)。

こう見ると、火山灰は、「恵み」ではなく「疫病神」に感じられるだろう。しかし、水はけのよい土は桑の生育には絶好だったようである。郡内では江戸時代になってから桑の栽培が行われ良い生糸が取れた。その織物をカイキといい「海気」「甲斐絹」とあて字した。江戸時代後半から昭和にかけて甲斐絹生産は全盛期を迎え、どの家にも機織り機があったようだ。「当時は機織りの女性たちが家の主のようで、男たちが奉仕するような有様だった」と地元のお年寄りが話してくれた。甲斐絹は、江戸・東京から買い付け人が来て、郡内には絹問屋が多く生まれた。そのひとつが「都留市商家資料館」として残っている。

甲斐絹で潤った時代、郡内地方では教育にも力を入れ立派な学校を創立した。その一例が、現在の「尾県(おがた)郷土資料館」である。1878年(明治11)に建築された洋風木造の小学校であり、ほぼ往時そのままの教室、よく保管された多くの教科書に感動する。教育重視の土地柄が、市立大学でありながら全国に名を知られる都留文科大学(1953年創立)を生み出したのかもしれない。郡内地方には苦しい時代もあったが、養蚕・絹織物・教育による地域づくりは、富士火山灰のひとつの恵みと言ってよいのではないだろうか。

<予習資料>

申し込まれた皆様には、20 ページからなる予習資料をお送りしました。一部を掲載します。



横山大観筆

<A>富士をめぐる文学・史籍

「日本三代実録」(貞観6年(864)7月17日 甲斐国の報告) 現代語訳

「駿河国の富士山が大噴火した。峰を焼き砕き、草木は焦がれ死ぬ。土や石くれが流れて八代郡の本栖湖と剱(せ)の海を共に埋めた。湖水は熱湯になり、魚や亀の類は全滅してしまった。民家は湖と共に埋まり、残った家にも人影は無く、そのような例は数え上げることもできない。ふたつの湖の東には河口湖という湖があり、火はこの方角にも向かっている。湖が焼け埋まる前に大地震があり、雷と豪雨があり、雲や霧が立ち込めて暗闇に包まれ、山と野の区別もつかなくなった。しかる後に、このような災厄が訪れたのだ。」

「海道記」(作者不詳。鎌倉時代の紀行文。貞応2年(1223)4月4日に京を出発、同月17日に鎌倉に到着) <小澤訳>

「富士山を見た。都で聞いたように、空に聳え立ち、周りの山々とはまるで比べ物にならない。山裾を鳥が飛び越え、麓には谷が刻まれている。人が歩いた形跡もなく、山に向かって谷が上がっている。雪を頭巾のように山頂にかぶり、雲は腹帯のように中腹をめぐる。その高さは天に上る階段のようであり、登らんと試みるものも途中で引き返す。旅人が富士の麓を過ぎるのに何日もかかり、ようやく麓を過ぎて何日も富士が背後に見え続ける。山頂には湯が沸いているようで噴煙がたなびいている。山麓には豊かな水を蓄えた湖があり、ここから河が流れ出ている。まことに富士は他の山々を超える霊山である。」

富士をめぐる美術

狩野探幽筆 「富士山図」
葛飾北斎 「富嶽三十六景」
横山大観筆 「富士」
片岡球子筆 「めでたき紅富士」

<C>富士をめぐる詩歌

※下線部は富士の噴火を示す。

※せ(剱)の海とは、溶岩流により分断される前の湖。分断されて現在の西湖・青木ヶ原・精進湖となった。

万葉集 319 (高橋虫麻呂作か)

「なまよみの甲斐(かひ)の国、うち寄する駿河(するが)の国と、こちごちの国のみ中ゆ、出で立てる、富士の高嶺は、天雲(あまくも)も、い行きはばかり、飛ぶ鳥も飛びも上らず、燃ゆる火を雪もち消ち、降る雪を火もち消ちつつ、言ひも得ず、名付けも知らず、くすしくも、います神かも、せの海と名付けてあるも、その山のつつめる海ぞ、富士川と人の渡るも、その山の水のたぎちぞ、日の本の大和の国の鎮めとも、います神かも、宝ともなれる山かも、駿河なる富士の高嶺は見れど飽かぬかも」

和歌3選 (小澤選)

※下線部は富士の噴火・噴煙を示す。

駿なき煙を雲にまがへつつ

世をへて富士の山と燃えなむ

紀貫之(古今和歌集)

人しれず思ひするがのふじのねは

わがごとやかく絶えず燃ゆらむ

伊勢(伊勢集)

風になびく富士の煙の空にきて

ゆくへも知らぬ我が思ひかな

西行(新古今和歌集)

<D>富士信仰の歴史

(1) 富士信仰のはじまり

富士宮市にある縄文中期の千吾遺跡は富士山の祭祀遺跡と考えられる。

奈良時代のころから、役小角(えんのおづの)の

信仰登山の伝説が作られていった。役小角は、大和の葛城（かつらぎ）山や、金峰（きんぷ）山で修行したとされる。

平安時代に最澄・空海によって密教がもたらされると、仏教的な装いを加えた神仏習合の山岳宗教が始まる。平安中期の真言僧聖宝（832-909）は、金峰山で修行し興隆に努めた。聖宝に始まる真言宗系は、吉野・金峰側を入口として大峰・熊野に入って修業の場とした。のちに当山派と称した。一方、天台宗系の園城寺僧も、大峰・熊野などを修業の場とした。1090年（寛治元）に白河上皇の熊野に御幸した際、園城寺の増誉（1062-1116）が先達を務めた功績で、初代熊野三山検校に任じられた。この系統を本山派と称する。

平安末期から鎌倉期にかけて、密教系の山岳信仰は地方に広がっていく。北陸の白山信仰や、奥羽の羽黒信仰等があったが、それぞれの地に修験と呼ばれる修業僧集団が生まれていった。

では富士が霊山とされる経緯は、どのようなものか。「日本霊異記」は、役小角が罰を受けて都を追放され、富士山で修業した物語を伝える。「扶桑略記」に引用される「役公伝」にも似たような話があり、富士明神の力により役小角は赦免されたということになっている。

都良香（みやこのよし 834～879）の「富士山記」には「富士山は山腹より上は白沙が山をなし、登ろうとしても白沙が流下するのでなかなか上に達することができない。だが昔、役小角というものがいて頂上に登ることができた。」とある。実際の登山経験によることが濃厚であるが、その登山者が誰かは記されていない。古代に登山したものがいたことは否定できないが、基本的に富士は登るより仰ぎ拝む霊山であったと言えよう。

（2）村山修験の全盛期

富士山頂を初めてきわめた確かな人物は、史料に残るかぎり1149年（久安5）の末代（まつだい）上人である。「山頂に登り大日寺を建てた」と「本朝世紀」（1150年に鳥羽法皇の命で藤原通憲＝信西が編集着手）に記録がある。末代が登山の拠点

にしたのは、現在は富士宮市に属する村山であり、ここから上る村山道が富士登山道の最初のものであろう。

1930年（昭和5）8月に富士山頂から経筒と経巻残欠が出土した。その経筒には鎌倉時代の承久の年号が記され、経巻には「末代聖人」が読み取れた。現在、村山にはこの埋経から約40年後の1259年（正嘉3）に北条時頼が寄進したという銘のある大日如来が保存されている。

このように、中世における主な富士登山道は村山からであった。ここを拠点とした村山修験が、須山・須走・吉田・河口などの登山道を開発していった。村山には、大鏡坊・池西（ちせい）坊・辻之（つじの）坊など幾つもの坊があって、富士修験の拠点となった。1967年（昭和42）の記録でも、村山では古来の「富士峰修行」を伝えており26日間に及ぶ厳しい修行の様子がわかる。

室町時代から戦国時代にかけて富士信仰を独占的に担った村山修験であったが、これに結び付いたのが東海の戦国大名今川氏であった。修験者である山伏は、諸国の関所を自由に交通できるので、これを諜報活動に利用したのである。さらに今川氏から分かれた伊勢新九郎（のちの北条早雲）も、村山修験と結びついていた。

しかし、桶狭間で今川義元が敗死、氏真が武田に攻められ逃亡すると、村山修験は没落していく。やがて後北条氏も滅び江戸幕府が開かれると、家康は今川・後北条を助けた村山修験の弱体化を図り、代わって富士宮浅間神社に資金援助をしていた。こうして現在では村山口はすっかりさびれ、南麓の登山道としては富士宮口が中心になっている。

（3）富士講のはじまり

中世末期、村山修験が没落の兆しを見せ始めたころ、特に富士西麓・北麓に新しい動きが始まった。長崎に生まれた長谷川（藤原）角行は、元亀から永禄ころ（1560～70年代）富士山西麓に入り難行・苦行により独自の富士信仰を深めていった。富士登山128回のほか不眠・断食など多くの荒行

が伝えられる。1646年（正保3）富士西麓の人穴において106歳で死去した。

その流れをくむ伊藤身禄（1671 - 1733）は食行身禄（じきぎょうみろく）と名乗り、富士信仰・庶民救済の教義を深めた。その主張は時に激しく、幕府政治の批判もあった。63歳のとき、富士北麓七合目の烏帽子岩で断食入定した。

その後、身禄の弟子たちの関東を中心とした布教により、明和・安永（1764 - 81）のころには江戸に富士講が爆発的に広がる。身禄の直弟子たちは各自独立して講親となり、その弟子、弟子の弟子も独立して新講を組織した。この仕組みにより、江戸八百八講と称される数多くの富士講が生まれた。富士信仰は、朝廷や大名に支えられた修験者の活動から、広く町民・農民の実践的な活動によって代わられたのであった。富士講では、「孝行・善行のすすめ」「賭博・喧嘩の禁止」などの道德律を説き、共助による富士山への集団参拝を行った。村上光清は、身禄よりも11年のち1682年（天和2）に江戸日本橋の葛籠商人の子として生まれた。父も富士講の行者（長谷川角行から5代目の月心）であったため、幼くして富士信仰に浸っていた。村上光清は、角行からの直系ということで諸大名・旗本から代参を頼まれるなど、家業収入とともに豊かな財政力を持っていた。現在の北口本宮浅間神社の建造物の多くは村上派の寄進によるものである。

（4）富士塚

遠隔地にあって手軽に富士参拝を行える施設として作られたのが富士塚であり、関東各地に作られ多くが現在も残っている。1780年（安永9）身禄派に属する高田籐四郎が水稻荷の境内に建てた塚（早稲田大の敷地拡張の際に破壊）が最古であるとされる。都内における現存最古は、千駄ヶ谷の鳩森八幡神社にある千駄ヶ谷富士である。江古田の富士塚（茅原浅間神社）、豊島長崎の富士塚（富士浅間神社）、下谷坂本の富士塚（小野照崎神社）、木曽呂の富士塚（川口市東内野）の4基は国の重要有形民俗文化財に指定されている。

明治・大正期になっても富士講は盛んであったが、関東大震災ののち東京の変容とともに衰退していった。

（5）富士の八葉蓮華信仰

富士講では、神仏混淆に基づいた修行として仏座の蓮弁にかかわる八葉巡拝が行われた。次のように全国におよぶ巡礼を行ったのである。

山頂：富士山頂には大内院（噴火口）の周りに剣ヶ峰（3776m）、白山岳、久須志岳、成就岳、伊豆岳、朝日岳、駒ヶ岳、浅間岳の8ピーク（八神峰）がある。これらを巡礼するのが、「御鉢巡り」である。

忍野八海：出口池（面積最大・精進池とも）、お釜池、底抜池、銚子池、湧池（毎秒湧水2.2 m³）、濁池、鏡池、菖蒲池を指す。

内八海：富士五湖のほかに、明見湖（あすみのうみ）、四尾連湖（志比礼湖、しびれのうみ）、泉端（泉水湖・仙水湖とも。せんづのうみ※現在の北口本宮浅間神社の手水舎の水はここから引水）を合わせて指す。

外八海：二見浦、琵琶湖、諏訪湖、榛名湖、中禅寺湖、佐倉湖（桜ヶ池、静岡県）、霞ヶ浦、芦ノ湖とされる。

（6）富士の徐福伝説

中国の史書「史記」や「太平御覧」によると、始皇帝（紀元前247 - 210）は晩年になり、神仙の術を行う道士である徐福に「東海のかなた三神山に赴き不老長寿の薬草を探し求めよ」と命じたそうである。命を受けた徐福は数千人の若い男女を従えて船出したが、遂に帰国することはなかった。三神山とは、蓬莱・方丈・瀛州（えいしゅう）のことであり、「竹取物語」でも「東の海に蓬莱という山あるなり」と記されている。後に蓬莱や瀛州は日本の呼称ともなった。10世紀の中国僧・釈義楚の「義楚六帖」にも、徐福のことが記される。この中で958（顕徳5）年に日本僧・弘順が「徐福は各五百人の童男童女を連れ、日本の富士山を蓬莱山として永住し」と話したと伝える。熊野を

はじめ、日本各地に徐福ゆかりの伝承が残されている。

富士信仰の聖地のひとつ「明見湖」の傍らには、徐福の墓と伝えられる石造建造物がある。

<E>郡内の支配と民衆

(1) 小山田氏

秩父有重が武蔵国小山田荘（現・町田市）を本領としたことに由来する。この一族から、鎌倉時代に甲斐国に移り郡内地方の谷村を本拠として勢力を振るった甲斐小山田氏が出た、といわれている。武田氏が治めた戦国期の甲斐では、それまでの有力国衆は武田家臣団に組み込まれた。しかし、郡内地方では小山田氏が、武田に従属しながらも半ば独立した支配権を有していた。1519 年（永正 16）信虎は本拠地を川田館から甲府へ移転し、躰躰ヶ崎館を築造して城下町整備を行う。これに伴い家臣団を城下に集住させ、小山田氏も甲府に屋敷を置いた。その一方では、小山田氏は 1530 年（享禄 3）本拠を郡内谷奥の中津森館から谷村へ移転し、城下町整備を進めた。戦国末期に武田勝頼が織田信長の侵攻を受けると、小山田信茂は勝頼の亡命を拒否し勢力の保全を図った。しかし、それまでの武田氏との密接な関係が災いし、信長に不忠者として一族滅亡させられた。

(2) 鳥居氏

1600 年（慶長 5）の関ヶ原戦勝後、家康は鳥居成次に谷村領 1 万 8000 石（のち加増して 3 万 5000 石）を与えた。家康 8 男徳川義直が甲府城主になると、成次は附家老となる。1616 年（元和 2）には 2 代將軍秀忠の子国千代（徳川忠長）が甲府城主となり、成次は引き続いて附家老となった。成次は 1631 年（寛永 8）に死去し、長男の鳥居忠房が継いだ。しかし、徳川忠長は兄の 3 代將軍家光との確執により、翌 1632 年（寛永 9）に改易された。鳥居忠房もこれに連座して改易され、その身は山形藩主鳥居忠恒に預けられた。

(3) 秋元氏・柳沢氏

秋元家は 13 世紀に上総国秋元荘を領したのに

始まる。秋元長朝は後北条氏、次いで関東に転封された徳川家康に仕えた。関ヶ原で上杉景勝の投降を促した功により、1601 年（慶長 6）上野国総社藩 1 万石に加増された。総社藩は長朝のあと泰朝が継ぎ、鳥居氏の改易により、1633 年（寛永 10）谷村領 1 万 8000 石に入った。秋元氏は、谷村藩政において郡内織の奨励や谷村大堰・新倉掘抜の開削など産業振興を行った。その子孫喬知のとき 1704 年（宝永元）に、秋元氏は武蔵国川越藩 5 万石に栄転した。代わって柳沢吉保が甲斐を治めたが、20 年後に吉保の子である吉里は大和郡山に転封となった。

(4) 幕府直轄領

1724 年（享保 9）8 代將軍吉宗は、甲斐国を直轄領として甲府勤番をおいた。この支配は明治維新まで続いた。幕府直轄領としての甲斐では、甲府城に禄高三千石旗本の甲府勤番 2 名が置かれ、その下にいる勤番士 200 名が甲府城警備と城下町の町政を担当した。村方の支配は、甲府・上飯田・石和の三分（ぶ）代官によって統轄された。谷村代官所は、石和代官所の出張（でより）陣屋であった。幕府直轄領下の甲斐では、治水・灌漑事業、新田開発による米の増産が進み、甲州葡萄は江戸に出荷された。郡内でも、絹・紬（つむぎ）織の生産が進んだ。甲府勤番士の師弟教育の場として、甲府には徽典館（きてんかん）が、谷村には興譲館が開かれた。ペリー来航に始まる開国の動きは、甲斐国にも大きな変化を与えた。横浜を中心とした輸出の中心は生糸であったので、生糸価格は上昇し、養蚕・製糸業の活性化をもたらした。

(5) 郡内騒動（天保七年一揆）

郡内は耕作地に乏しく林業や郡内織など農業以外への依存が強く、米穀は国中や相模・駿河からの移入に頼っていた。1833 年（天保 4）から 1835 年（天保 6）にかけて冷夏が続く、米価が上昇した。郡内では織物不況による打撃を受けていたが、さらに谷村の米穀商が買占めを行ったため米価が高騰していった。

天保7年8月17日(1836年9月27日)夜半、谷村で近郷百姓による米穀商への打ちこわしが発生した。下和田村の武七(治左衛門)・犬目村の兵助は鳥沢村で合流すると、米価引き下げを求めた強訴を計画し一揆勢の頭取となった。黒野田村の名主・村医師の泰順(たいじゅん)が綱領を起草した。武七は当時70歳。兵助は当時40歳。兵助は蜂起に際して妻に離縁状を出している。武七・兵助は貧民救済のため、国中の熊野堂村・奥右衛門家に代表される富裕層の米買い占めを停止させることを目論む。両名は郡内勢を率い国中へ向けて出立し、道中各地で打ちこわしを行い、奥右衛門宅の打ちこわしを行ったのち帰村した。

当初は武七・兵助に統率され百姓一揆の作法に則った活動を行っていたが、国中に至ると無宿人らが参加し騒動は激化・無秩序化した。無宿人に率いられた国中勢は郡内勢と分かされると暴徒化し、鉄砲や竹槍などで武装し、盗み・火付けなどを行い、村々に一揆への参加を強制した。国中勢は8月22日には石和宿を襲撃すると二手に別れ、一方は甲州道中から甲府町方へ向かい、一方は笛吹川沿いに南下した。甲州道中を進んだ一揆は翌8月23日に甲府町方を守備する甲府勤番・甲府代官の手代らの防衛線を突破し甲府城下へ乱入、穀仲買や有徳人らの屋敷を打ちこわし火付けを行った。8月23日に甲府町方における打ちこわしを阻止できなかった甲府勤番・甲府代官は諏訪藩に出兵を要請し、国中諸村に対し一揆勢の殺害を布達した。打ちこわしの報を受けた甲府盆地の諸村では、独自に情報収集を行い防衛に務めた。信州高島藩兵などの出兵により、8月26日に鎮圧されるまで甲斐の国は無政府状態であった。この間、甲府町方のほか106ヶ村305軒が打ち壊された。

騒動収束後に幕府は石和代官所において取り調べを行った。郡内蜂起の主導者となった武七・兵助は奥右衛門宅打ち壊しの後に一揆勢から離脱し帰村するが、武七は自首し捕縛された。武七は石和宿で磔に処されることが決まるが、牢死した。他の被疑者も併せて死罪13人、追放93人をはじめ受刑者総数562人であった。

犬目宿の兵助は甲斐から逃亡し、北陸など各地を流浪した。兵助は旅日記を残したとされ、天保10年以前には犬目村へ戻り家族を連れて安房国木更津へ渡り、奈良姓に改姓して寺子屋を経営したという。犬目の法勝寺の宗門人別帳等の史料によれば、兵助は1858年(安

政5)より前には安房から故郷へ戻り、慶応年間に死去したようである。綱領を起草した黒野田宿の泰順は天保9年に石和代官所において入牢するが、翌年に特赦され帰郷している。



犬目宿兵助墓碑

<F> 郡内の教育・産業

(1) 尾県学校(現・尾県郷土資料館)

明治初期の藤村式と呼ばれる擬洋風に建てられた建築。尾県学校は、地元の人達が木材を切り出し建設した。1877年(明治10)に完成し、1941年(昭和16)に統廃合されるまで地域文化の中心的役割を担った。藤村式とは、明治7年から20年までの間に山梨県でさかんに建てられた洋風建築「ふじむら」とは、当時山梨県令であった藤村紫朗にちなみ山梨県だけに通用する言い方である。尾県学校は、NHK大河ドラマ「八重の桜」の教室風景ロケに使われた。

(2) 都留文科大学

1953年(昭和28)に山梨県立臨時教員養成所として発足し、1960年に4年制の都留市立都留文科大学となった。小学校教員養成に力を注いで卒業生の多くが教職に就いている。人口約3万人の地方小都市である都留市が大学運営をしてきたという、全国的にまれな大学である。

学生の出身地は都留市が約 1%、山梨県内でも約 10%、約 90% 近くは他の都道府県から学生が集まる全国区大学である。寮がなく学生の 9 割近くが大学周辺に下宿し住民登録している。このため、市の人口で最大の世代は 20~24 歳であるという、これまた珍しい自治体である。

1964 年に都留文大附属小が設置され、他の公立小と変わらない運営がなされている。つまり学区内に居住していれば誰でも入学できる。大学の附属小としては全国唯一の存在である。

(3) 谷村大堰 (やむらおおぜき) 家中川 (かちゅうがわ)

秋元泰朝は総社領内において、用水開削や養蚕の奨励を行った。寛永 13 年 (1636) からおよそ 3 年の月日をかけて、田原の滝から桂川の水を取り入れて「谷村大堰」を開削した。ここから家中川・寺川・中川などの用水が引かれた。これらの用水は、郡内中心部の生活・手工業・農業に役立った。

(4) 甲斐絹 (かいき)

オランダ南蛮船に乗った更紗と共にもたらされ、加伊岐・海気・改機・海黄・海機とも書かれた。最も多く使用されたのが「海気」であり、この言い方は明治中頃まで地元で使われていた。いつ「甲斐絹」と呼ばれるようになったか諸説があるが、産地としての認知度を高めるため甲斐という文字を当てはめたものと思われる。

一説にはその起源はさらに遡り、徐福一行が富士山麓へと辿り着き、古代中国の「養蚕と機織り」の技術を伝えたという古文書が「徐福伝説」として残るほど、この富士北麓地域は織物技術にゆかりがある。

自然環境についても、織物産業が根付いてきた理由を見出すことができる。富士の湧水はきわめて硬度が高く、ほとんど塩素を含有しないため、色糸の発色を高めつつ色ずれのない微妙な色合いの再現に適している。「甲斐絹」は、その独特の張り、光沢や風合い、そして多様なデザインで多くの人々をとらえ続けてきた。

井原西鶴の「好色一代男」や「好色一代女」には郡内篇として登場しているように、江戸では羽織

裏地として評判となり、江戸・明治そして昭和初期まで甲斐絹生産は隆盛を極めた。

<G> 桂川水系の発電

富士の恵みとして、特に近代社会が受けたものは何だろうか。

1 つは観光資源として価値がある。特に東京五輪年 1964 年に開通した富士スバルラインに関わる地域振興である。2 つには富士山頂レーダードームがある。やはり 1964 年に開設された世界最高地点に作られた気象観測レーダーであり、気象予測機能を飛躍的に高めたが、1999 年に役割を終えた。二つとも近代の中でも期間限定の恵みである。

これらに対して、近代初めから現在まで大きな役割を果たしているのは、何といっても水力発電であろう。

駒橋発電所はトラック・ブルドーザー等ない時代に手作業で建設が進められた。ここから東京方面に遠距離送電されることによって、工業立国日本がスタートしたといえよう。現在では電気は工業だけでなく生活に欠かせない存在になっている。

富士湧水を源とする桂川の水をいかに有効利用して電力を生み出すか、これに知恵を絞った先人たちの努力に目を見張る。地下資源を浪費し気温上昇を引き起こす火力発電、特に天災の多い国土には危険な原子力発電等に比べ、水力発電は環境負荷が少なく耐久性は極めて高い。



小水力発電元気くん2号
三の丸発電所跡

2011 年東日本大震災以降、水力発電の見直しの声が高くなり、小水力発電の研究会には主催者が驚くほどの参加者が来るようになっている。特に、桂川の水を使って幾つもの小水力発電に取り組んでいる都留市には多くの見学者が来る。

桂川系水力発電をまとめる

※発電能力等は建設当時 ※＜ ＞は当時の経営会社

～山中湖から桂川～

① 忍野発電所 忍野で取水 ＜忍野水力電気＞
1922 (T11) 8月運用開始 800kw 落差 39.84m
毎秒水量 2.78 m³

② 鐘ヶ淵発電所 忍野で取水 ＜桂川電力＞
1922 (T11) 3月運用開始 2600kw 落差 113.22m
毎秒水量 2.78 m³

※河口湖の水は新倉掘抜の歴史を経て、現在は嘯川疎水により桂川に流れている。

③ 鹿留 (ししどめ) 発電所 明見 (あすみ) で取水
1913 (T2) 5月運用開始 16800kw (現 18400kw)
落差 142.4 m³ 毎秒水量 15.71 m³ ＜桂川電力＞

④ 谷村 (やむら) 発電所 (深田発電所) 鹿留で取水
1920 (T9) 12月運用開始 4500kw (現 14700kw)
落差 114.54 m³ 毎秒水量 15.30 m³ ＜桂川電力＞

⑤ 川茂発電所 ダム式 ＜桂川電力＞
1922 (T11) 5月運用開始 2400kw (現 2500kw)
落差 12m 毎秒水量 25.04 m³

⑥ 駒橋発電所 《落合水路橋を經由》 ＜東京電燈＞
1907 (M40) 12月運用開始 15000kw (現 21200kw)
落差 104.54m 毎秒水量 25.04 m³

⑦ 葛野川発電所 (揚水) 《上》大菩薩湖 (上日川ダム)
《下》松姫湖 (葛野川ダム) ＜東京電力＞
現在 1・2・4号機各 40 万 kw 3 基 (最後の 3 号機が 2024 年完成後は 160 万 kw) 落差 751m (世界最大の落差)
毎秒水量 280 m³ (3 号機完成後)

⑧ ハツ沢発電所 駒橋で取水 《ハツ沢 1 号水路橋・2 号水路橋・大野貯水池など經由》 ＜東京電燈＞
1912 (M45) 7月運用開始 42,000kw 落差 116.29m
毎秒水量 41.74 m³

⑨ 松留発電所 ハツ沢の排水 ＜東京電燈＞
1928 (S3) 4月 運用開始 1440kw 落差 4.24m
毎秒水量 41.74 m³

～相模川 (支流は除く)～

⑩ 相模発電所 相模ダム (相模湖) ＜神奈川県営＞
1947 (S22) 6月竣工 31,000kw 落差 43.5m
毎秒水量 85.0 m³

⑪ 津久井発電所 津久井湖 (城山ダム) ＜神奈川県営＞
1943 (S18) 2号機運転開始・翌年 1号機 計 23000kw
(現 25000kw) 落差 45.4m 毎秒水量 32.57 m³

⑫ 城山発電所 (揚水) ＜神奈川県営＞
《上》城山湖 (本沢ダム) 1985 《下》津久井湖 (城山ダム) 2001 25 万 kw 落差 31.4m 毎秒水量 192.0 m³

—ミニ歴史散策—

鷗外記念館など 本郷界隈を散策

多田統一

2019 年 7 月 7 日 (日)、午後 2 時森鷗外記念館に集合、学芸員の説明付きで館内を約 1 時間見学、その後午後 4 時まで、根津神社・弥生式土器発掘ゆかりの地碑・東大工学部タンデム加速器研究棟を回った。参加者は 4 名 (内会員 3 名) であった。

森鷗外記念館

“文学とビール”をテーマにしたコレクション展が開催されていた。鷗外は、明治 17 年から 21 年まで陸軍軍医としてドイツに留学した。留学中の『独逸日記』によれば、ビールの利尿作用を研究し、各地の醸造場を見学したようである。鷗外のこの体験は、『うたかたの記』(明治 23 年)などの作品に生かされている。誕生日祝いに贈られたビールジョッキなど、産業史の史料として貴重な展示もあった。しかし、鷗外自身の飲酒量は、ジョッキ 2〜3 杯程度だったようである。

根津神社

ここは、3 代将軍家光の次男綱重 (甲府藩主) の屋敷地であった。権現造の拝殿・唐門・透塀・唐金灯籠などを見ることができた。本郷台地から根津谷への崖線、地形変化を見事に生かしたツツジの植え込みが、荘厳な社殿とマッチした景観は見事である。家宣胞衣塚、鷗外が寄進した銘水飲み台の場所も確認することができた。

弥生式土器発掘ゆかりの地碑 タンデム加速器研究棟

言問通り沿いの、東大工学部敷地角の三叉路にある。考古学上あまりにも有名な場所である。日曜日であったが、幸いにも工学部敷地内にあるタンデム加速器研究棟を見ることができた。この加速器は考古学上の遺物の年代測定などに使われる。

2019年度の歴史教育研究助成金

友の会から全歴研発表者へ贈呈

2019年7月24日（水）、全歴研第60回大会（東京大会・中野サンプラザ）の分科会発表者10名に対し、本会から歴史教育研究助成金（額面5,000円の図書カード）を贈呈しました。

これは、本会が東京都歴史教育研究会の歴史教育研究の推進を支援するための事業として、全国大会で研究発表する教員を対象に助成金を贈る事業で、毎年行っています。

贈呈者氏名と大会分科会における発表テーマは次のとおり。



田中駿一先生（都立南多摩中等）

多様な考えを引き出し、共有し合う日本史Aにおけるアクティブ・ラーニング型授業

武藤正人先生（都立日野高）

これまでの実践を「探究」につなげるには

海上尚美先生（都立浅草高）

高校って何するところ？

～博物館の教育支援機能を軸に

青木一真先生（都立国際高）

概念的理解と世界史探求

上田隆之先生（都立国立高）

ふたつの立憲制の比較と

日本法制史の変遷について

北村 拓先生（都立日野台高）

限られた授業時数の中で

「問いを立てさせる」工夫

大木 健先生（都立科学技術高）

第一次世界大戦—その性格と惨禍—

相川浩昭先生（都立荻窪高）

生徒の問いづくりを促す授業の開発と評価

大館一基先生（都立大山高・定）

定時制課程における

『歴史総合』を見据えた試行錯誤

塚原直人先生（都立国際中等）

受験指導と両立させる

資料読解能力・思考力・判断力・表現力

を育成する世界史授業の工夫

全歴研大会分科会報告

多田統一

今年の全歴研は、60回目の記念すべき大会であった。テーマは、「新しい歴史教育の創造を目指して～転換期の歴史教育の在り方～」。中野サンプラザを会場に開催された。筆者は、都合により7月24日（水）午後の分科会へのみの参加となった。新しい歴史学習の提案をした第5分科会に出てみた。

・田中駿一（都立南多摩中等教育学校）：「多様な考えを引き出し、共有し合う日本史Aにおけるアクティブ・ラーニング型授業」

前任校の都立六郷工科高校での実践である。キャリア教育を意識したもので、ものづくり人材を育成するために歴史教員の果たす役割について考え

ることができた。海苔舟からロボットまで、地元には産業史や技術史の豊富なフィールドがあり、それを活用することができる。地理や工業科との連携、産学連携についても今後の展開が期待できよう。外国人生徒の増加の中で、日本語教育の重要性和歴史授業の見直しについても議論が行なわれた。発表者の柔軟な発想とその分析力は、自らの参考としたい。

・相川浩昭（都立荻窪高校）・池尻良平（東大大学院情報学環）：「生徒の問いづくりを促す授業の開発と評価～定時制課程における世界史Aの実践を通して～」

生徒に問いを作らせるという試みが興味深かった。

いい問いを出す生徒ほど、成績もよいという結果が出たようである。生徒が問いを作る過程、つまりいったい何をヒントにどのような意識が働いたかについて知りたかったが、教育工学的にその分析は難しいようである。もし、絵や写真をヒントにしたのであれば、教材づくりに生かせるのではないだろうか。探究学習と授業評価の在り方については、とても参考になった。

・海上尚美（都立浅草高校）：「高校って何するところ？—博物館の教育支援機能を軸に考えてみる—」

発表者は、長年博学間連携について実践してきている。博物館での体験学習に生徒を引率したり、収蔵品の実物レンタルを活用したりと、それ

らをコーディネートする力には圧倒された。それぞれの学校の事情もあるので、歴史の授業だけでなく遠足などの学校行事やクラブ活動（地理・歴史クラブ）に取り入れることも可能であろう。博物館側も、予算面や人材の確保に苦慮している現状があり、今後退職教職員のボランティアの支援が必要になってくると思われる。

（全歴研大会分科会報告は、一分科会のためのレポートになってしまい不十分な報告となり、お詫び申し上げます）

会員の著書紹介

高原 將著

『私の「日本100名城」巡り』

上巻 1城目（二条城）～48城目（高遠城）
下巻 49城目（鬼ヶ城）～100城目（五稜郭）
2019年8月28日発行A4判248頁私家本

2012年5月6日に1城目の二条城を訪れ、100城目の五稜郭を訪ねたのは2019年6月21日。7年以上の月日をかけての「100名城」巡りの記録である。上下巻共に300枚を優に超え

る写真が付けられている。「おわりに」によれば、「100名城」のそれぞれの城でのスタンプを押し、それを日本城郭協会に送ると「日本100名城登城認定完了書」なるものを頂けるとのことで送ったところ、2019年7月19日付けで3086番目



国宝の現存天守「彦根城」



古式ゆかしい現存天守「丸岡城」

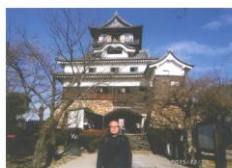


畿北の現存天守「弘前城」

私の「日本100名城」巡り 上巻

1城目（二条城）～48城目（高遠城）

高原 將



国宝の現存天守「大田城」



国宝の現存天守「松本城」

表紙の城は天守が現存する12城のうち、松戸・鶴岡目までを訪れた3つの城である

の「登城完了者」に認定されたとのことである。なお、高原氏は四国歩き遍路の記録を2009年7月28日にA4版184頁の『四国歩き遍路 1147kmを62日で』として、同じく二度目の四国歩き遍路の記録をA4版208頁で『四国歩き遍路 二周目は弘法大師と同行二人』として2012年7月28日に刊行されている。いずれも私家本である。

コロナ禍のなかの友の会活動について



東京都歴史教育研究会友の会第14回総会は、例年の要領で、都歴研総会及び都歴研春季講演会に併せて開催し、本会の解散総会となる予定でした。ところが、新型コロナウイルスの流行とそれに伴う外出自粛等の要請を受け、中止いたしました。この総会準備のための世話人会はメール審議に変更しておこない、今後の方針を決めました。それに基づき4月20日、会員宛に次のようにお知らせをいたしました。

友の会諸行事凍結のお知らせ

新型コロナウイルス蔓延の極めて深刻な状況に鑑み、友の会の諸行事を当面1年間凍結致します。

具体的には、例年6月に開催していた都歴研総会・講演会に併せ開催していた友の会総会と講演会参加そして懇親会を中止し、2021年開催予定と致します。また、史跡見学、例えば、5月9日に予定していた「鎌倉New Waveを訪ねて」は2021年5月28日に変更致します。その他、「友の会だより」14号・解散記念号の発行は当面その発行を延期します。

ただし、これらについてはコロナ収束の目途が立った段階で改めて検討することと致します。尤も、収束の目途が半年後なのか1年後なのか数年後なのか判りかねます。申し訳ございませんが少々お待ちください。

なお、「友の会だより」解散記念号は、先にご案内しました通り全会員の記念文集です。原稿の締め切りは過日4月末としましたが、7月未までお待ちします。すべての会員の皆様の玉稿をご期待申し上げます。

くれぐれもくれぐれもご自愛の程お願い申し上げます。

友の会々員各位

2020年4月20日

世話人一同

友の会主催の史跡見学「鎌倉New Waveを訪ねて」については、別に次のような延期のお知らせとご案内を送付しました。

「鎌倉New Waveを訪ねて」 1年延期のお知らせ

多くの方から参加申し込みいただきましたが、残念ながら新型コロナウイルスの影響により下記のように延期することといたしました。約1年後となりますがどうぞよろしくお願いいたします。

日時 2021(R3)年5月28日(金)

雨天決行 午前10時ころ鎌倉駅前の集合

※ミステリーの内容にかかわって、来年は、週末にはできませんのでご了承ください。時間は変わりません。

詳しい集合案内は、来年の4月中頃にはお送りできると思います。

プレイベント

秋になって世情が落ち着けばプレイベントのご案内をいたします。

11月7日(土)を考えています。

鎌倉に向けての予習 外出もままならぬ近頃、鎌倉本などいかがでしょう。比較的易しく読める本をご紹介します。

「鎌倉謎解き街歩き」

じっぴコンパクト選書—実業之日本社

「武家の古都『鎌倉』を歩く」

祥伝社新書

連絡先

小澤拓美 oz22@oregano.ocn.ne.jp

Fax 042-391-9500

〒189-0026 東村山市多摩湖町4-14-13

友の会ホームページ リニューアル

<http://rekishitomonokai.sakura.ne.jp/>

トップ
ページ



都歴研友の会も2013年4月にホームページを開設しましたが、このほどリニューアルして内容を一新させました。友の会からの諸連絡、これまでの国内・海外研修旅行の記録、創刊号からの「友の会だより」等がご覧頂けます

《友の会だより》解散記念号

自由原稿をお寄せください

「友の会だより14号」(本号)は通常の内容で発行し、来年7月に「友の会だより15号」を「解散記念号」として最後の発行を予定しました。多くの会員から「都歴研の思い出」「歴史教育実践の思い出」その他「自由投稿」(随想、紀行文、論文など)の原稿を頂戴して編集いたします。

これまでに頂いた原稿は、

思い出することなど／都歴研の思い出／私の世界史授業／エトルリア人を追いかけて／普陀山・天台山紀行／江戸時代の流行病、など。

発行を遅らせたので、締め切りも伸ばします。ゆっくり想を練ってください。

原稿締切 2021年4月30日

なお、「友の会だより」の創刊号から15号までを合本とし、国会図書館、都立中央図書館等に納本手続きをしたいと考えています。

「友の会」は、解散後も現世話人会メンバーを中心として年一・二回の情報交換会や旅行を通じて親睦を図る純粋な都歴研退職者の親睦団体となる予定です。その連絡方法はメールまたは紙ベースに頼ることとしたいと思います。従って、情報交換会あるいは小旅行の案内を希望される方はその旨申し出て頂き、その際メールアドレスをお持ちの方はぜひお知らせいただければ、ご連絡を差し上げます。

編集後記

友の会の解散も決まり最後の「たより」です。ところがその原稿作成中に新型コロナウイルスの流行に遭遇し、本会の活動は全面休止したので、本号記事は秋の見学会が中心となりました。会員各自の歴史教育などについての自由投稿は、最終号となる次号で特集します。コロナ禍の影響で発行を1年遅らせますので原稿をお寄せください。